

童

謡

赤い林檎
 林檎を食むは一みじみと
 別れを告げ秋の夜の一みじ
 薄くささやかなうらみと
 林檎の匂い
 思ふは赤い林檎の匂い
 母の匂いと
 赤い林檎をまた一みじみと
 載して見よう

赤い林檎

女の子の歌集

鳥の手相	小島 正子
水人の顔	小島 正子
赤い林檎	小島 正子
母の匂い	小島 正子
別れを告げ	小島 正子
薄くささやかなうらみ	小島 正子
林檎の匂い	小島 正子
思ふは赤い林檎の匂い	小島 正子
母の匂いと	小島 正子
赤い林檎をまた一みじみと	小島 正子
載して見よう	小島 正子

青鳩

夕焼け小焼け、

お寺の森で、

青鳩が啼く。

◇ 一聲啼けば、

◇ 蚊が一升ふえる。

二聲啼けば、

蚊が二升ふえる。

あれ／＼また啼く、

ぽっぽう、ぽっぽう。

(「赤い鳥」第1巻第2号所載)

鴉、鴉

鴉、鴉、鴉、

昨宵、背戸の山火事で、

◇ 焦げた木の実を啄突いて、

◇ 赤い舌をやけどして、

舌が熱いと啼いて行く。

ほう、ほう、啼いて行く。

(「赤い鳥」第1巻第2号所載)

廻り燈籠

消えるぞ／＼灯が消える、

廻り燈籠の灯が消える。

◇ 廻り燈籠の灯が消えりや、

暗い軒端に鬼が来る。

消えるな、消えるな、灯を消すな、
廻り燈籠の灯を消すな。

(「赤い鳥」第1巻第4号所載)

天の川

白い鳥、白い鳥、
白い鳥、二つ、
天の川、わたれ。

わたった、わたった、
わたった、わたった、
仲よく、わたった。

(「赤い鳥」第1巻第6号所載)

子雀

桑の葉が伸びる
雀が巣立つ。

巣立った雀、
障子の穴から
覗いて見たら、
一羽、二羽、三羽、
チュンチュン飛んでゐる。

(「赤い鳥」第2巻第5号所載)

中山晋平宛書信

(大正11年11月7日・8日?)

昨夜は遅くまでお邪魔いたしました、電車は、丁度いい
具合でした。

さて、童謡少しばかりお送りいたします。考えてみる
と、もう十一月もやがて中旬、今年の中に二冊出すとす

れば、この十五日に決るとして、楽譜の版下、表紙絵、組、校正、の日を数へれば随分忙しいこと、存じます。今度の集りにこそは、二冊分が纏って、びっちり決まるやうになりたいと存じます。私も出来るだけ新らしいものも作り、スキートホームもスパニッシュダンスの歌詞も持って参りませう。何卒今度は澤山伺へるやうにお願いいたします。

歌詞原稿の中、「赤い林檎」と「夜話の後」は青年男女の歌とも民謡ともどっちつかずのものです、そろそろそらいふもの、習作として作ったものをそのま、お眼にかけます、御教示下さいますやうに。

赤い林檎

林檎を噛めばしみじみと

別れて遠い秋の夜の

薄いなさけが身にしみる

林檎の艶のさへぐくと
照る灯に夢は還るとも
悔いるともない心かよ

赤い林檎をまた一つ
載せて見つめるたなご、ろ

さんたくらうす

風が吹いてゐて (、)
お月夜で

母さま お留守の 戸口の扉

誰か来て、か 叩いてか

ことこと おかしな 音がする。

さんたくらうすの 小父さんか

そろ／＼寝ませうか (や)
また叩く

硝子の 隙から のぞいたら

青い月夜の町の角

すた／＼回ったうしろ影

さんたくらうすの小父さんか

山の学校

山の学校にや先生がひとり

小使部屋にや鴉の子

雪降りや いつでも日曜日

先生が囲炉裏で独り言

山中暦日なしの心持です。

明き家

私の家が一番地

あなたのお家が三番地

中の二番地戸が閉まり

青い芭蕉の影ばかり

人の住まない家に対する小供ことに女の児たちの感ずるか
るい不気味さと、また、一寸のぞいて見たい好奇心です。

霜の兒ども

御覧、しづかにあの窓を

こんな夜更けに、お月夜に

霜の兒どもが、来てゐるよ

あしたの朝は凍らうよ。

あした眼さめりや硝子戸に

かんかん明あかいお日ばかり

霜の兒どもの影はなく

山の木の葉が、たゞ一つ。

雪と霜

冬の真夜中凍る中

雨戸の外へ来るものは

山の親子の雪と霜

坊はお寝間でよくねんね

霜の子供の来る晩にや

雪の小父さん遠い山

夜明けりや垣根の霜柱

遠いお山は白マント

雪の小父さん来る晩にや

霜の子供は洞の中

夜あけりやお庭に雪達磨

坊はお頭巾赤マント

黒と白

黒いは瓦焼く家いへの

夕焼小焼に並ぶ窓

土堀る男の背のほくろ

白いは町の瀬戸物屋

店に並んだ皿小鉢

八百屋たまなが通る甘藍たまなの葉

金閣寺

京の子供が三條の橋で
二人並んでお月夜に」

（京の三條の橋の上
二人子供がお月夜に）

私の好きなのは金閣寺
お池に映った金閣寺
私の好きなのは銀閣寺
お山の麓の銀閣寺」

いえいえ私は金閣寺
いえいえ私は金閣寺
いえいえ私は銀閣寺
いえいえ私は銀閣寺」

郵便局

郵便局の扉口

人が出て来てまた入り
人がうつつてまた消える

柱の時計が二時五分

郵便局の窓口に

青い切手がついと出て
赤い切手がついと出る

柱の曆は水曜日

郵便局の裏口は

赤い車が走りこみ

黒い靴がかけて出る

柱のうしろの電信機

中山晋平宛書信（大正11年11月29日付）

四つばかりお送りします、「おはなし」を除く外はま
だく御協議の上訂正すべき箇所があると思ひます。

「冬の星」は、素人考へでは、支那風の曲をつけたなら
どんなものかと思ひます。「堤の貉」はおどけた中に、
少し気味悪い幽闇とでもいふ趣きがあらうかと考へます。
とにかく御叱正を願ひます。就ては、第一集の広告面
へ予告が入る筈ですから、御選定の上、その名前だけな
るべく早くハガキなりで御しらせ願ひたいと思ひます。

二十九日早朝

海野生

中山様

おはなし

おばさま おばさま

こんばんは、

こないだ、垣根の鬼灯が

赤い提灯、つけました

お家にや、涼しい風が吹き

玉蜀黍畑の姉さんは

もうせん お嫁に行きました

おばさま おばさま

さやうなら

冬の星

支那の居留地に支那の子が一人

日暮明りにたった一人

壁にもたれて後ろ手くんで

うつ、心にたった一人

何なにを見て、か、考かんがへてゐるか
壁かべにもたれてならんだら――

風かぜの夕空ゆうぞらに冬ふゆの星ほしが一つ

日暮明りにたった一つ

風かぜに吹かれてまばたきして、
白しろく光ひかってたった一つ

堤の貉

雨あめの降ふる晚徳利ばんとくりさげて

小僧こぞさんひよこ〜何処どこへいく

小僧こぞさん法衣ころもで顔かくし

「在家ざいけへお酒さけを買かひに来た」

お酒さけなみ〜お肴さかな買かって

小僧こぞさんひよこ〜お帰かへりか
従ついてきや堤つみで不意ふいに消きえ
「勘定かんじは晦日みそかに取りとに来な」

晦日みそか尋ねりや芒すすきの中なかに
茨いばらをかぶつて貉たぬきの巣す
奥おくで誰だれかゞしやがれ声こゑ

「せんだのお酒さけにあてられた」

歌祭

空そらにやちらく〜お星ほしさま

何なにか夜花よばなが匂かほります

涼すずしい窓まどをみなあけて

みんなで歌うたをうたひませよ

あまり淋さびしくないやうに
赤あかい燈火あかりを一つ置をき
歌うたがしづかにひゞくよに
青あをい燈火あかりを一つ置をき

一人歌ひとりうたへば六人にんは
しづかに聴きいて一人ひとりづ、
七ななつの歌うたをくりかへし
今宵こよみひと夜よは歌祭うたまつり

かへり路

今日けふも北風きたかぜ、もう日ひが暮くれる
遠とほい焚火かまどの枯草堤かれくさづえ
空荷車からにぐるまがからく帰かへる
さあさ、帰かへろよ独楽こままたあした

水田みづうらちらく／＼燈あかりもついた
一羽いちば鴉がしも啼なき／＼渡わたる
今日けふのお月つきさまざまだ／＼細ほそい
早く帰かへろよ暇ひまは駆かけて

さあさ急いそごよ襟卷えりまきしめて
暇ひま起おこえてもまだ家遠うちとほい
山やまの灯あかりは火葬場やまばの人ひとか
暗くらくなつたよもつと／＼駆かけて

赤い櫓

かんからり かんからり
ちんからからり

鳴り鳴りとほる 櫓の鈴

かんからり かんからり
ちんからからり

列んで通り またとほる

鈴は金色 櫛は赤

子供ばかりの赤い櫛

雪は降る降るクリスマス

さんさらり さんさらり

さんさらさらり

雪の降る間に鈴が鳴り

鳴っては通り また通る

路はしろじろ 櫛は赤

鐘も鳴る鳴るクリスマス

後の鬼が島

鬼が島 小島は、何処かいな

ぽかぽか日南ひなたの 海の中

春風はるかぜ時分にや 花ざかり。

鬼が島 小島は、何処かいな

そよそよ小風の 離れ島じま

お祭時分にや 笛太鼓。

鬼が島 小島は 何処かいな

うらうら明るい 浪の上

お月見時分にや 雁の聲。

鬼が島 小島は、何処かいな

こんこん小雪の 降る小島

「子供達の歌」第1集「赤い櫛」
所載、初放送・大正15年9月26日

餅搗時分にや、杵の音。

〔「子供達の歌」第1集「赤い櫛」
所載、初放送・大正15年10月12日〕

からくり

見世物小屋の小父おぢさんは、

塩しほっぱい声をはりあげて――

“とんと、落した、からくりは、

昔や東海道、初のぼり。

お駕籠で、お供で、

ほいの、ほいの、ほい”

見せ物小屋の小母さんも、

塩っぱい声をはりあげて――

“とんと、お次の、からくりは、

お江戸日本橋や、七つ立だち

行列揃へて、

ほいの、ほいの、ほい”

〔第1節のみ「子供達の歌」第1集「赤い櫛」所載、レコード初吹込、ニッポノホン15109・歌手外山国彦〕

秋の夜

あなたが、ねんねの枕もと。

お母さま、おひとり、ほどきもの。

解いても、解いても、夜は浅い。

雁、雁、わたった後の空。

お月さま、おひとり、濡れた顔。

照っても、照っても、夜は浅い。

はら、はら、時雨の霽れた屋根。

迷子の鼻が、来てとまり。

ほう、ほう、啼いたら、夜が闇けた。

〔「子供達の歌」第1集「赤い橋」
所載、初放送・昭和14年10月6日〕

郷愁

さすらふ旅の 果にして、

はかなく病めば、秋の日の

思ひはとほし、夢にみる

幼きころの 故郷の家。

あゝ、懐しや、夢は帰る、故郷の家。

夕の月の かげにさへ

むかしの家は ほのみえて

門辺の榎、庭の柿、

響くはとほき、紡車。

あゝ、懐しや、夢は帰る、故郷の家。

空しく旅は かさなりて、

悲しき夢は ひとりゆく、

海山とほく、末とほく、

故郷の空の 旧き家。

あゝ、懐しや、夢は帰る、故郷の家。

〔「子供達の歌」第1集「赤い橋」所載〕

自分達の言葉

「子供達の歌」を、今後続刊して行くにあたって、自分

達は、かく虔しく申し出る。

子供の歌は、どこまでも子供達の心持から離れたくない。勿論いろいろな意味で。——時代に即して、真に日

本に育つべき音楽があるならば、先づ、子供達の歌から

育てたい。

「子供達の歌」は、作歌者と作曲者との、親しい會合の下に生れ出るものである。

謡はるべき歌としての歌詞は、なほ、詩としての氣品を失ひたくなく、曲譜も、また、ただに旋律の遊戯ではありたくない。歌詞の持つ、生命、韻律、香氣等、そのまま生きて旋律化し、曲譜の持つそれらも、同じく、生きて歌詞に発しなければなるまい。

「子供達の歌」には、純創作のほか、外国の歌曲をも合せ掲げる。それには、概ね、一つは常識としても知って置きたいもの、いま一つには、歌はるべくしていまだ歌はれない優れたものとを宛てる苦である。それらの歌詞も、春の曲に冬の薄れ日の歌をあてるやうなことは、つつしみたい。

何れにせよ、この「子供達の歌」の一つ一つが、子供達を歓ばせ、純真な子供達の口から、自づから歌ひだされ、ば、自分達の願は足りるのである。

鳩の笛社同人

外山国彦 小田島樹人
中山晋平 海野 厚

童 心

(曲水7-12)

ひとりごと

山芋、とろろ、唐辛子、

行燈の、灯が、消えさうだ。

山芋、とろろ、唐辛子、

行燈に、油を、さしてやれ。

山芋、とろろ、唐辛子、

行燈の、灯が、盞とろんだな。

小鳥の巢

烏、烏で、烏の巢。

雀、雀で、雀の巢。

鳶、鳶で、鳶の巢。

雨降りや、どの巢も、濡れか、り、
日が照りや、どの巢も、かあらから。

七色鉛筆

お聴きなさいな、七色の、
色鉛筆は兄妹よ。

一番長い 樺色は、
油絵を描く お兄さま。

そのつぎ長い 紫は、
袴をはいた お姉さま。

なんなんなかの 紺色は、
中学生の お兄さま。

並ぶ、緑と青色は、
二人よく似た 妹たち。

いっちおいたの 弟は、
低く 黄色な 汚れたの。
残る 短い 赤いのが、
一番末の 坊なのよ。

一つの函に、七色の、
色鉛筆は兄妹よ。

（「子供達の歌」第2集「七色鉛筆」所載）

露地の細路

露地の細路、通しやんせ。

横町のお茶屋へ、お茶買ひに。

露地は、夕顔咲きかゝり。

斜はすに、ちやつとよけ、通りやんせ。

露地の細路、通しやんせ。

横町の酒屋へ、酒買ひに。

露地は、夕顔咲きかゝり。

斜はすに、ちやつとよけ、通りやんせ。

「子供達の歌」第2集「七色鉛筆」所載、レコード
初吹込、ニッポノホン、昭和2年2月、歌手平井英子

月夜の畑

月夜の畑はたけの、白れんげ。

ほんのり、佇たたったは、人かいな。

ちよろちよろ小溝こなぞの、音かいな。

月夜の、月夜の、白れんげ。

そよそよするのは、風かいな。

うろうろ白いは、犬かいな。

月夜の畑の、白れんげ。

月夜も、畑も、夢かいな。

月夜の月夜の、白れんげ。

「子供達の歌」第2集所載、レコード初吹込ニッポ
ノホン15109、歌手外山国彦、放送はニコペン会
による、大正14年11月18日が初出

おもちゃのマーチ

やっところ、やっところ、繰出した。

おもちゃのマーチが、ラッタッタ。

人形の兵隊、勢ぞろへ、

お馬も、犬も、ラッタッタ。

やっところ、やっところ、ひとまはり。

キューピも、鳩も、ラッタッタ。

フランス人形も、とびだして、

笛吹きや、太鼓が、パンパラパン。

「子供達の歌」第2集所載、初放送は現
存の記録としては大正15年6月18日で、
伊藤武他が歌っている

ひなまつり

ひももの花に お白酒

あられ草餅 緋毛氈

おひなさまの お祭りに

皆様お招き いたませう

五人囃子の おはやしに

官女の舞の 美しくさ

前ぢやみんなで 賑やかに

お琴をひいたり 歌ったり

遊んでやがて 日が暮れりや

お内裏様も おさびしい

早くおあかり 點(と) もしませう

おぼろおぼろの 離段に

楽しいたのしい 夜が更けて

外はほんのり お月さま

薄桃色の ぼんぼりに

ねむりやさきいな 夢ばかり

中山晋平「童謡小曲」第4集所載、レコード初吹込 ビクター150624
昭和4年2月、歌手平井英子

背くらべ

柱のきずは、をと、しの、
五月五日の、背くらべ。
粽たべたべ、兄さんが、
計ってくれた、背のたけ。
きのふ くらべりや、何のこと、
やつと、羽織の紐のたけ。
柱に凭れりや、すぐ見える、
遠いお山も、背くらべ。
雲の上まで、顔だして、
てんでに、背伸してゐても、
雪の帽子を、ぬいでさへ、
一は、やっぱり、富士の山。

「子供達の歌」第三集「背くらべ」所載、
中山晋平作曲目録によるとレコード初吹
込はニッポノホン15109、歌手外山
国彦、ピアノ伴奏中山晋平である

「子供達の歌」第3集のあとがき

集中の「背くらべ」は、初め一節だけの歌詞で作曲しましたところ、蓄音機のレコード吹込のため、いま一節歌詞が必要になって、作曲出来後、第二節をつけることになりました。それゆゑ、出来るだけの注意はしたつもりですが、なほ多少無理な個処があるかも知れません。場合に依つては、一節の歌だけで充分と思ひます。さういふことにお含み置き下さい。(大正十二年五月)

輪舞

ララララララ、ララララララ、

緑の風吹く 野原で

吹かれ、吹かれて、歌をうたひ、

歌を揃へて、踊、をどろ。

くるり、くるり。

雲雀も 舞ひ舞ひ、ピッチッチ。

ララララララ、ララララララ、

蒲公英、莖が、開いた。

花の咲く原、子供の国、

子供ばかりで、踊、をどろ

くるり、くるり、

お日さま、まだまだ 高い。

向日葵

向日葵さん、向日葵さん。

お蔵のかげに、ひとりぼち。

向日葵さん、向日葵さん。

島の時計は、いま何時。

向日葵さん。

田甫の郵便、来ませんか。

〔「子供達の歌」第2集所載、昭和56年刊
講談社「日本の唱歌」(中)にとられている。〕

〔「子供達の歌」第3集所載〕

雀たづねて

お手々に杖つき、茶の頭巾、
舌切雀のお爺さん。

雀をたづねて、田舎路。

「雀のお宿は、ここかいな」

知らずに、来てゐた山の中。

あちらも、雀に竹の藪。

こちらも、雀に笹の藪。

あちらも、こちらも、藪雀。

いつか、お山は月がさし、

お腰はいたむし、埒あかず。

それでも、雀のお爺さん。

やっぱり、「雀はどこかいな」

「子供達の歌」第3
集所載、初放送大
正14年7月。「中山
作曲目録・年譜」
山頁にくわしい紹
介がある

山は夕焼

山は夕焼、さびしいな。

鶏さがしに、出てきたが、

穂に穂が揺れて、また揺れて、

山は、いちめん、芒の穂。

明日は、北風、木の葉風。

「子供達の歌」第3集所載、大正14年10月6日、他の
小田島樹人作曲のものとおわせ初放送

早春

林の奥に、そよかぜ起ち、

小鳥の夢を、そよそよさまし、

緑の木の芽、さやさや揺り。

谷水ぬるみ、せせらぎもれ、
浅黄の空に、白雲ながれ、
日永の路に、かげろふ燃ゆ。

ながるる水に、春風のび、
野山へ里へ、隣りの国へ、
霞はかよひ、今こそ春。

(「子供達の歌」第3集所載)

信号燈

汽車の番人、シグナルさん。
カターリと赤いひをともし、
コトーリと青いひをとます。

今夜は、お月さん出ないうち、

きいろいあかりをつけないか、
片手番人、シグナルさん。

(春秋社「世界音楽全集」第24卷所載)

桃の咲く路

一、桃の咲く路 眠い路

ねんねのお背せなで 行ったらば

ほんのり 霞に一軒家

何処かで 鶏鳴いて居た

二、桃の咲く路 夢の路

ねんねの日傘で 行ったらば

こんもり小藪に わらの屋根

お馬が 石臼ひいて居た

(室崎信子蔵)

少年詩・少女詩・少年小説



少年
新詩

口笛

耳を澄ませば口笛が

門のあたりで呼んでゐる

愛弟の吹いたくちぶえに

あまりよく似た恋しさに

急いで飛んで出は出たが

誰も居ない夕日かけ

西もひがしも白い路

ほつつり私の影法師

淋しくなつてそのまんま

いつもの寺へ来て見れば

愛弟の墓の木瓜の花

ほろほろ咲いてゐたけれど

どうにもならない淋しさが

涙ぐませる眼で見れば

愛弟の墓の木瓜の花

花も震へてゐるような

(海国少年5-4所載)

少年
新詩

母と兎の唄

「五月の海に浮かぶ帆は

おほ空わたる白い鳥

藤の葉陰に置く椅子は

お伽の国の骸子ろか」

浜別荘のおばしまに

鈴が鳴るくく鳴る鈴は

緋の天鵞絨の上靴の

母子の唄のあひに鳴る

「五月の園に咲く花は

寶石^{ぼく}筥^ぼの華^{だて}美^も模^も様^{よう}

泉水^{いすみ}の岸に鳴く鳥は

魔法の国のつかはし女^め」

母子^{わやこ}の唄のやんだ時

沖の群帆^{むねは}の日はかげり

緑の風がなごやかに

鸚鵡^{わうむ}の籠を吹きぬける

少年
新詩

かくれんぼ

(海国少年5-5所載)

涙^{なみだ}ぐましい夕^{ゆゆう}がたの

遊び^{あそび}疲^{つか}れたかくれんぼ

二人^{ふたり}かくれた片^{かた}かげの
乾草^{かれくさ}小舎^{こや}の薄^{うす}あかり

そこはかとなくよつてきて

また遠^{とほ}のいたうす笑^{わら}ひ

草履^{ぞうり}の音^{おと}がなくなれば

壁^{かべ}のくづれの虫^{むし}が鳴^なく

ものさへ言^いはぬ二人^{ふたり}なら

虫^{むし}のなくのもやるせなく

二^{ふた}つの頭^{あたま}をあはせても

おいてきぼりのつまらなさ

何時^{いっ}まであてもなし

さびしくなつてそのまんま

そつとぬけでた樹^きの梢^{うれ}に

あさぎの空^{そら}の暮^{くれ}の星^{ほし}

(海国少年5-7所載)

ときめき

真夏となりぬ。

夕まぐれ、

水浴着の匂ふ、

浜づたひ。

暮れゆく空の、

白鷗。

二羽互に、

啼きつるる。

少女の胸に、

見いでしは、

此日新しき、

微笑よ。

白き手

少女よ。

卿が射裡に、

忘れられたる、

美しきものを知るや。

そは、

いつも、もの言はぬ十指。

親指は、力。

人差指は、叡智

中指は、飾らぬ品位。

紅差指は、美。

小指は、含羞。

(令女界2-7)

五指——

聚りてしなやかに、
白く靱く、さて美し。

少女よ。

せめて、日に一度。

卿、しみじみ、

その白き手をながめ、
虔しき十指を愛憐しめよ。

(令女界2-8)

夜 愁

— 民謡風 —

夏も

をはりか、

樹の梢に

なにかゝるて鳴く

薄あかり。

一重の帯を

絡げばとて、

何かさびしい

夜の虫。

独り

しみじみ

涙ぐむ

月夜の笛よ

なぜ遠い。

(令女界2-9)

藤椅子にて

大地震と大火の夜は

いま、明けかゝり、

W字星座の光うする、

いつ時のこの爽かさ。

悲しき冬

郊外の狭き庭より、
合歡の葉ごしに透く
東京の黎明空の美しさ。

何処に幾千の家が倒れ、
何処に幾万の生命が断たれ、
何処に夜一夜焼けついた
幾十万の家があつたか。

空は澄み、和やかに
涼しく軽き小雲を浮かべ、
地上の蚊は、いま一つづつ
一すぢに昇天す。

「冷たく、白き編み棒に
黒きミネルバの毛絲かけて
この終日を編むは、なに？
——黒はよし、わが愛む彩」

「黒は、喪の彩。
かつ編むは、

この冬の日のわが肩かけ

わが住みし東京は今亡し。
十七のわが春秋を
育てし夢の跡も空しく、
この冬の、焼野の風は寒からめ。

ひとはりごとに悲びをこめ、
ひとはりごとに願ひをかけ、
やがて、わが
喪の肩かけの編みあがらば……

ひとりの少女、
喪の色につつまれて、
亡き東京を偲ばむがため」

大正12年10月9日
令女界2—12

春の挨拶

また一つ、よき人どちに
新な春はめぐりきて、——

おん母に、
よき袖絡きて嬌えてし、

昨日の君もいつしかに、
十六のをとめとなりて、
たをやかに。

相見ては
含羞ぐせの君もはや
黒髪ぶりのふりはへて
十七のをとめとなりて
はしけやし。

この日ごろ、
もの、あはれを知る故の
哀しき詩のしげしとて
歎ける君も今日はとて、
十八のをとめとなりて、
蕩たしや。

よき人どちに、また一つ

春は新にめぐりつれ。

(令女界3-1)

若き店員のうたへる

陳列棚の前に佇ち、

流行の髪に束ぼうと、

私はやはり田舎の子。

春先の、季節の品を商うとて、

華やかな人の間に佇たうとて、

ふとも惚ふは

——田舎家の、草の匂と風の音。

せめて、そのとき心では、

奥様に伴れられた

お美しい方よりも、

(いつもお買物は尠いが)

田舎訛の楮ぐろい掌のお客様。

そんなお方を待つものを——

今日もどうやら私はさみしく、

春の百貨店、

彩とりどりの日が暮れる。

(令世界3-3)

少女詩 芒の路

芒の路がありました、

青い芒の葉をわけて、

芒の路をゆくひとは、

とほい山こす旅のひと。

芒の路が枯れかゝり、

白い芒の穂がなびき、

通るはまたも旅のひと、

いつも夕日に影法師。

棄てて忘れた故郷の、
古いかすかな思ひ出に、
芒の路がありました、
夕日の路がありました。

(令女界316)

泉のうた

泉水

うららかに渦紋をうみ、
渦紋

うららかに溶けてゆく。
秘泉のほとり草のうへ
新樹のかげに君が涼傘
二人をつつみ護りけり。
涼傘
うららかに日をすかし、

日は

うららかに長けてゆく。

(令女界317)

いつわり

忘れよう、とおっしゃったとき、
わたしは哀しくうなづきました。

○けれども、あれは嘘！

どうして忘れてしまへませう。

あの丘がおぼえてゐます。

あの路がおぼえてゐます。

あの青い空がおぼえてゐます。

いえいえ、

たとへみんなが忘れてしまつても、

わたしひとりは、

わたしひとりは、

忘れません 忘れません。

(令女界3110)